

著作の執筆と出版こぼれ話（その二）

所 功（81歳）

B 宮廷儀式・行事の研究

- 1 『平安朝儀式書成立史の研究』（国書刊行会、A5判990頁）昭和60年（1985）12月（44歳）
- 9 『新訂 官職要解』（講談社学術文庫、文庫判456頁）昭和58年（1983）11月（41歳）
- 10 『新訂 建武年中行事』（講談社学術文庫、文庫判460頁）平成元年（1989）9月（47歳）

平安時代の政治文化史を人物中心の研究から始めた私は、53を出版したころから、むしろ宮廷社会で不可欠な儀式・行事の正確な理解が必要と考えて、先賢に学ぶため、近世近代の有識故実書などを読みあさった。

とりわけ和田英松博士（1865～1937）は、明治17年（1884）入学の東京大学古典講習科（国書科）で国学者たちから歴史・文学・法制にわたる有職故実を学び、晩年まで東大の史料編纂掛（所）に勤めながら著作に励まれた。

そのうち、『官職要解』（初版、明治35年→修訂版、大正15年）は、律令官職を平安時代の実情に即して、考証解説した名著である（武家官職と神職・僧官も付記）。また、『建武年中行事註解』（初版、明治36年→増訂版、昭和5年）は、後醍醐天皇が建武年間に宮廷の年中行事（日中行事も付記）を纏められた原本に、和田博士が上代から近世までの主要な有識故実書などを引用しながら簡潔に解説された名著である。

そこで、この両書を多くの人々に読み易くするため、難字にルビを打ち、要語説明文の旧仮名を新仮名に改め、簡単な注記を加えるなどした「新訂版」を作り、ある先学の紹介により、講談社の学術文庫（9と10）として頂いた。

しかし、研究に必要な儀式・行事書は、平安朝の宮廷人（皇族・貴族・諸官人など）にとって実用的なマニュアルであるから、原本に次々と書き入れしたり原文を書き改めることが多い。それゆえ、古写本や諸書所引の逸文を博搜して、原本・原文を復元し改変の過程を解明するのに、十数年間を要した。その考証結果二十数篇を集大成したのが本書であり、文部省出版助成をえて国書刊行会（編集担当奥山芳広氏）から上梓した。

なお、そのころ法学部で「日本法制史」を担当していた私は、法制史学会で知遇をえた慶応義塾大学の利光三津夫教授（1927～2009、日本律研究者）に学位申請の相談をした。すると教授は宮廷儀式も律令格式と同様「法制」の一環であるから、本書を慶大へ学位論文として出すよう勧められ、主査として懇切に審査の上、翌年九月「法学博士」号を授与して下さった。

- 2 『宮廷儀式書成立史の再検討』（国書刊行会、A5判802頁）平成13年（2001）1月（59歳）
- 11 『京都御所東山御文庫本 撰集秘記』初版、国書逸文研究会、昭和55年（1980）1月（38歳）→増訂版（国書刊行会、A5判560頁）同61年（1986）1月（44歳）
- 12 『京都御所東山御文庫本 建武年中行事』（国書刊行会、A5判272頁）平成2年（1990）10月（48歳）
- 13 『礼儀類典 解説書』（雄松堂出版、A5判80頁）平成3年（1991）1月（49歳）
- 14 『朝儀祭祀篇 北山抄』（神道大系編纂会、A5判722頁）平成4年（1992）6月（50歳）

15『朝儀祭祀篇 西宮記』（神道大系編纂会、A5判960頁）平成5年（1993）6月（51歳）

私は昭和50年（1975）春から6年間、文部省の教科書調査官として多忙を極めたが、毎週一日「宅調」（自由研究）を認められていた。そこで、古写本・古文書を都内の主要な文庫・図書館で調べ廻り、購入した写真の山を休日に読み解く作業を京都産業大学へ移ってから十数年続けた。

その考証論文や翻刻史料の主要なものを体系化して前掲書1としたが、そこに未収の論考およびその前後に出した影印本・校注本の解説部分などを修正したのが2である。

このうち、まず11の『撰集秘記』は、院政期の藤原為房（1049～1115）が数種類の「秘記」を儀式行事の項目ごとに分類引載したもので、その秘記（書名不記）が原本に近い「清涼記」「蔵人式」「九条年中行事」「西宮記」「北山抄」「拾遺年中行事」などであることを初めて究明した。そこで、その一古写本とみられる京都御所東山御文庫を底本として他本との校異などを注記した影印本を作った（初め国書逸文研究会の私家版。のち国書刊行会から出版）。

また12の『建武年中行事』については、前述のごとく和田英松博士の註解本に校訂を加えて文庫本化した。その現存古写本として注目されるのは、後醍醐天皇の宸筆本を正平7年（1352）以来転写してきた京都御所東山御文庫本である。よって、その写真を頒けて頂き、それに校注と解説を加えて出版した。

ついで13の『礼儀類典』は、水戸藩主徳川光圀（1628～1701）の発案により平安以来の諸家日記から宮廷儀式・行事の項目ごとに主要記事を抄出分類したもので、光圀薨後まもない宝永7年（1710）献上の初治本と、それを大巾に修訂した享保19年（1734）の再治本がある。その再治本（全515巻・絵図3巻）をマイクロフィルムで出版するため、初治本との異同も含めて詳細な解説書を作った。

さらに、もっとも困難を極めたのは、14と15の校訂本である。これを担当したのは、上述の拙著1を国立歴史民俗博物館長の土田直鎮館長（1924～93）に献本したところ、すでに神道大系編纂会から引き受けておられた朝儀祭祀篇の『西宮記』と『北山抄』の校注本作りを全面的に肩代りするよう依頼されたからである。

そこで、十数年前から収集した両書の古写本（写真）と既刊本（複数）を検討した。そして『西宮記』は前田家尊経閣文庫所蔵「大永五年」（1529）の書写本を主要な底本とし、また『北山抄』は同文庫に平安後期から鎌倉時代の伝本を取り合せて校合した古写本（国宝）および巻十のみ公任が検非違使別当在任中（996～1001）の自筆本（国宝）があるので、それを底本とした。

ただ、『西宮記』は源高明（919～82）の編著であるが、従弟源雅信の孫源経頼（985～1039）あたりによって、本文を縮約して勘物を増補するなど、大幅に改変されている。それに較べれば『北山抄』は藤原公任（966～1041）の編纂した原本に追改は少いとみられるので、出版を急ぐ編纂会の要請に従って、『西宮記』よりも『北山抄』の校注本作りを優先した。

しかし、両方とも全体に異同が著しく、連日連夜の作業で視力も段々弱り、十分な誤植訂正ができないまま「責了」とせざるをえなかった。けれども、その間に気付いたことも多々あり、1の論考を部分的に訂正して14・15の解題に盛り込むことができた。

4 『三代御記逸文集成』(国書刊行会、A5判438頁) 昭和57年(1982)10月(40歳)

平安以来の貴族たちが書いた「日記」(日次記)は、宮廷の儀式・行事に関する具体的な記事が大部分を占める。それを宇多天皇(在位887~97)は十巻、醍醐天皇(在位897~930)は20巻、村上天皇(946~67)は30巻ほど書かれていた。しかし、その原本も写本も現存しないので、その一部を引用する諸書からの逸文を拾い集めるほかない。

それは、中津広昵(塙保己一の養子)が収集したものを、和田英松博士が本格的に増補して『御記纂』(大正6年刊)に収められていた。しかも、『西宮記』の既刊本(史籍集覧と故実叢書に所収)と『大日本史料』第一編を繰り返し読んでいた私は、『御記纂』未収の逸文が相当あることに気付いた。それを「拾遺」として『御記纂』の後に入れ、詳細な解題と人名・官名・書名索引および編年索引を加えたのが本書である(46『未刊論考デジタル集成』②に「『三代御記』の逸文に見る菅原道真」など所収)。

なお、和田博士の遺稿『国書逸文』(昭和15年刊)を若い研究者たちと講読し増補するために昭和53年(1978)「国書逸文研究会」を発足させた。その改訂増補版を仕上げた後、京都月例研究会(幹事竹居明男同志社大学教授)において、平成7年(1995)から本書の逸文を一条ずつ講読し続けてきた。

そのうち、最初の御記については、研究会のメンバー古藤真平氏(古代学協会研究員)が、主要な記事数例の論考を纏め『宇多天皇の日記を読む』(臨川書店、平成30年7月)として出版した。それに対して私は、全逸文を書き下し主要な語句に訳注を加えた「『宇多天皇御記』全訳注解」を『未刊論考デジタル集成』④に収録することにした(順徳天皇の『禁秘抄』全訳注解は『藝林』に連載中)。

7 『近代大礼関係基本史料集成』(国書刊行会、A5判278頁) 平成30年(2018)8月(76歳)

8 『大正大礼記録——絵図・写真資料集』(勉誠出版、PDF1348頁+解説) 令和元年(2019)9月(77歳)

近代の大礼(即位礼・大嘗祭・元号)は、明治の『皇室典範』と『登極令』に基づいて、大正4年(1915)と昭和3年(1928)に実施された。その昭和大礼60年にちなみ『別冊歴史読本』編集部から依頼された。そこで、学友の牟禮仁氏(のち皇學館大学教授)らに協力をえて編纂したのが、34『天皇の即位礼と大嘗祭』(新人物往来社、B5判263頁、昭和63年11月)と35『皇位継承儀式宝典』(同社、B5判260頁、平成2年5月)である。

そのころから関心をもって調査した資料のうち、大正の『大礼記録』(内閣、大正8年)は、本文128冊・絵図など3冊・写真帖4冊から成る。それを国立公文書館所蔵本により、マイクロフィルム版により出版したのが(臨川書店、全34リール、別冊の解説B5判82頁)である。また、そのうち、主な絵図と写真をカラーとモノクロでPDF版としたのが8である。さらに、それ約30年間に翻刻した明治・大正・昭和の大礼関係資料と論考を集大成して、令和大礼の機会に出版したのが7である。

(かんせい P L A Z A 令和5年7月30日)